

動物の進化と「命」学ぶ

小松・大森山名誉園長が講演

動物から「いのち」を学ぶことをテーマにした
講演会 能代市中央公民館で



秋田市の大森山動物園名誉園長で獣医師の小松守さんの講演「大森山動物園・半世紀の軌跡」が31日、能代市中央公民館で開かれ、参加した地域住民らが、動物の姿を通して、人間に通ずることや、生きるということについて考えを深めた。

市民おもしろ塾主催で、約40人が参加。小松さんは昭和27年、秋田市生まれ。帯広畜産大獣医学科を卒業して秋田市役所に入り、大森山動物園に配属。園長を務めるなど長年にわたり園の発展に尽力してきた。

この日は「動物から『いのち』を学ぶ」をテーマに、前身である県児童会館付属動物園（現在の千秋公園内）の開園から75年を迎えた同園の歩みや動物園の役割、命と向き合う現場の経験について語った。

小松さんは、同園が「動物と語らう森」をコンセプトにしているとした上で、同園で撮影した動物の写真やスクリーンに映しながら、「生きているモノたち」として動物を見るという意識を紹介。動物園に行ったら、動物が生きているというところを見てほしい。人と動物はイコールではないが、共に命あるものという思いを感じてほしい」と訴えた。

動物の進化について説明し、「偶然に誕生した命が、変化する環境に必然に適応し、自分の生き方を探し続けてきた」と語り、樹上生活に挑戦したサル祖先をはじめ、大型化したゾウや背を伸ばしたキリン、尾を長く太くしたユキヒヨウ、群れをつくるライオンといった、それぞれの動物の挑戦を伝えた。

小松さんは、絆をつくって子育てするのは哺乳動物のみだとし、生物学的な分析を紹介。「子は親を見てまね、学ぶ。子育てがうまくいかない動物は絶滅する。生き方が難しくなるとともに少子化が進み、確実な保育のため子育てが仕組みされた。そこに仲間、群れができ、助け合う社会ができた」と語った。

動物の姿に人間の姿を重ねながら、「根底には通じる大事なものがある」と強調。「命の流れは常に自然とともにあるが、現代の人間社会はどこか狂いが生じているようでもある。自然物である人間が、人間らしく生きる社会がどうあるべきか、人と自然が調和し、どう生きるかを考えることも必要かもしれない」と呼び掛けた。